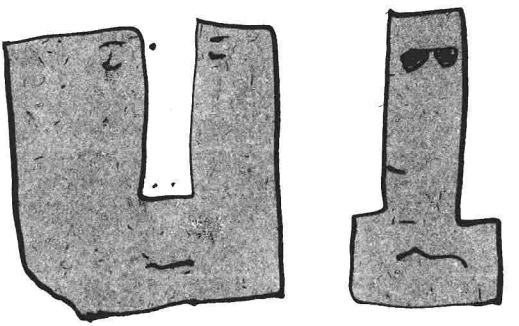
まつかなポー

長友啓典　黒田征太郎

コスカ、いま むかし 出会い 芳名録

まつかなポート



長友啓典　黒田征太郎

講談社

まっかなホント

一九八三年十月一日第一刷発行

著者——長友啓典・黒田征太郎
© Keisuke Nagatomo・Seitaro Kuroda 1983, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目一二番二一号　郵便番号一一二　電話東京(〇三)九四四一二一一(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——株式会社国宝社

定価——九八〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

まっかなホント　目次

大阪ミナミから――7
ヨコハマヨコスカいまむかし――29
出会い芳名録――51
歌は世につれ世は酒につれ――79
夢にうつつに六本木――105
受けて立つ!!――131

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

沖縄はかなしからずや——157
食う食えば食うとき食え！——185
てる日くもる日——213
男もつらい女も……——237
あとがき——260

AD・長友啓典
イラストレーション・黒田征太郎
ブックデザイン・野村高志＋K_2

まっかなホント

黒田征太郎

長友啓典

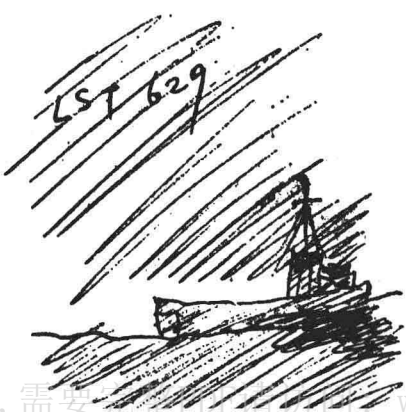
大阪ミナミから

LSTに乗って、オレは海に漂っていた

ヨコハマの北波止場で船をオリた。十八歳のちょい手前だった。約二年間をあの船で生活した。LST629号、米海軍の軍用船だった。主にインドシナ方面をやっていた。ディエンビエンフーでベトミンにひっぱたかれたフランス遠征軍外人部隊を、ハイフォンからサイゴンまでピストン輸送するのが仕事だった。

勤務外の楽しみはデッキで聞く手回しの蓄音器でのマイアミビーチルンバだった。

生まれて初めて口にするロールキャベツに満足していたし、乗船する以前の彦根西高等学校での勉強よりは三千馬力のエンジンの下に潜りこんでる下働きのほうがずっとよかった。なによりも、知らぬ他国に上陸できることが夢の夢だった。もちろん韓国、フィリピンなど日本人乗組員上陸禁止の港もあったのだが、昭和三十年、まだ戦後のドサクサだ、しようがない。オキナワのナハの港なんて沈



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

船のマストを縫って入港していたのだから。

サイゴンは上陸することがOKだった。

マジェスティックホテルの前にいつも着岸した。火炎樹が美しかった。オレは乗船した時のまんまの学生服でいつも上陸した。昭和三十年代のサイゴンの街を、ツメエリで歩いたのはオレだけだろうと思うけど。

そんな船を降りたのだ、ちんけな理由で船に居ることが出来なくなってしまった、のだ。悲しかったがしようがない。さて、どっちへ行こうかと考えた。横浜駅でパイナップルの缶詰とコティのおしろい粉を家族に送ってやった。船で元気でやってるぜという証拠のつもり、だった。とにかく東京へ行った。八重洲口の大丸で水色のハーフコートを買った。便所でそいつとツメエリを交換した。ツメエリは便所のドアーにハリツケにしてやった。水色のハーフコート姿のオレがウインドウに映る、ヤボもいいとこだ。自信が無くなった。とにかく、生まれ故郷の大阪へ行ってみよう。

黒田よ、ちょっと待ってえなぁ。そんなすぐ大阪に行ってしまわんと、なんで大阪に行く気ィになったんかいうのを、まず始めようやおまへんか。

最初、この連載の話を聞いた時、ホンマに出来んのかいなぁと思うてましてん。自分（黒田の事だす）は、アッチャコッチャ飛び廻ってるし、ボクかて時々ズレながら飛び廻ってるし、ほんま出来るのかいなぁと心配してましてん。そんな時、こんな話がありましてん。

おスミさんはなんとオレの先輩だった！

銀座の「まり花」でジン飲んでたらホキ徳田さんから電話がかかって来た。「飲みましょうか」「飲みましょう」久しぶりだ。ホキさんとはそう親しくもない、一回しか会ってないのだ。それもずーっと以前、ホキさんの旦那が亡くなる以前だ。しかし、一回しか会わなくったって、飲みましょうと思える人もいるのが酒だ。

しばらくしてもう一度、電話があった。赤坂の「千代新」で歌ってるからおいでということだったが、その時の気分では千代新は遠かった。そしたらしばらくしてホキさん、まり花にやって来た。いい感じで酔っていた。女の人の酔っぱらいでカッコイイ人はめずらしい。余談ではありますが、吉行淳之介さんがこの店で横になって飲んでおられたのもカッコよかったぞ。

ホキさんと坂本スミ子さんが一緒だった。お二人はよく似合う、とその時おもった。楽しくなった。ダラダラと飲めそうな予感が来た時、オレは舞いあがるクセがある。しかし、ホキさん毎朝が早いという。相手が男ならばオレ、じゃあ朝まで付合いましょうというのだが、女の人ではそうはいわん。これ差別なのだろうか。区別ですよね。

坂本スミ子さんと話をした。ビックリしたことが転がり出した。おスミさん、オレの先輩だったのだ。大阪はミナミのしにせバー「仏蘭西屋（フランス）」の店員として、半年間の差で顔を会わせることなし

だったのだが。そして今、銀座の地下で飲んでいる。一度、是非、仏蘭西屋へ行きましょう。約束してホキさんとおスミさんは帰っていった。

仏蘭西屋、たった三ヵ月でケツを割った店、しかしあそこでの三ヵ月、オレには大事な大事な貯金になった。

こんな話があってから、そんなら大阪へ行ったらお互い大阪出身やし、我々のつきあいもかれこれ二十年になるし、なんかおもろい話も出て来るのんとちがうかと、坂本スミ子さんに触発されて、今回とりあえず、「大阪ミナミ」となりましてん。

ボクもまり花いう店、時々行きますねん。シャンデリアも絨毯(じゅうたん)もない、小っちゃい店やけど感じよろしいでぇ。黒田は、ホキ徳田さん、坂本スミ子さんみたいな、劇的な場面がようあるようやけど、ボクにはあんまりおまへん。チトさみしい気もしますが……この店、なんか知らんけど不思議な店や。いろんな人が来てはるんで

す。さっきも出てきた吉行さん、星新一さん、小松左京さん、筒井康隆さん、阿刀田高さん、常盤新平さん、山口瞳さん、順番はむずかしそうやけど、ボクは門外漢でようわかりまへん。キラキラしてる人達ばっかりでっせぇ。和田誠さん、篠山紀信さん、赤塚不二夫さん、加納典明さん、思い出すのに難儀しまっせ、ホンマに。そやそや、おもろい人忘れてた、タモリはん。この人、ホンマおもろいわ。もっといてはりまっせ、桃井かおりさん。百貨店の社長さん、銀行のえらい人、大学の堅い人、ぎょうさん来てはります。そやけど、店、ひまですねん。

あんまり関係ない事いわんと、さっそく大阪の話や大阪の店の話をせなあきまへん。それにしても仏蘭西屋へ行った時の自分（黒田の事だす）の緊張ぶりはどないしたん。あんなん見たの、久し振りやで。早川先生と野坂昭如さんのお二人の前だけかと思うてたけど、仏蘭西屋のマスターもそのお一人ですなぁ。

「あんたはんエエくつしたはいてはりますな」これが出会い あれからもう何年たったやろか

仏蘭西屋のカウンターみがきながら、いつも見ていた仏女優マリナ・ブラディをかいたパステル画、ちょっとオレが今まで見てきた絵とは違ってた。絵画とか芸術とかというおしつけがましい勉強っぽいイヤなところがなくって、オレの目に心にかるーく入って来てくれた。後で知ったのだがあの作者、モダンアート協会の中村真さんだということだった。チョビヒゲのダンディなお客さんだった。洒落(しゃれ)た人だった。一、二度、アタタカイ言葉をかけていただいた。あの辺からオレ、えかきでもない、しかし、ちょっと面白そうな仕事をしてはる人達に興味を持ったのだろうか？　そして、なんとそのずーっと後にお世話になる早川良雄先生が、中村真さんとよく仏蘭西屋に来られていたそうだ。けど覚えていないのだ。

あの頃の地下鉄（改札口のそばで回数券バラ売りのオバハンがよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo